当院小児科病棟の付き添いの現状　～付き添い者の思いを考える～

３階東病棟看護科　森田　麻美　　谷藤　希光子　　北條　李佳

Ⅰ、はじめに

子どもの入院には24時間の付き添いが必要である。千歳市は、北海道一若い街と言われ、小児医療にかかる期待が大きいという現状がある。かつ地域的に核家族や転勤世帯が多く、近隣に頼れる親族がいないという問題を抱えている。そのため、子どもの一人が入院することによって、数々の問題が発生していると考える。当院でも乳幼児の患児に対して24時間の付き添いを依頼している。

付き添い者の多くは母親であり、家族での役割やサポート体制など、色々な問題を抱えていると思われる。少しでも家族の負担を理解し、寄り添う看護がしたいと考え、今回調査し、研究に取り組んだ。

Ⅱ．目的

小児科入院中の付き添い者のニーズを明らかにし、付き添い者に対しての援助方法を検討する。

Ⅲ．研究方法

１．調査期間：H21年7～9月
２．調査対象：当院小児科入院中の子どもに付き添う母親
３．調査方法：無記名で記入回答と選択回答を併用した独自に作成したアンケートを、付き添いしている母親に配布。ナースステーション前に回収ボックスを設置し、アンケートを回収した。〔資料１〕

Ⅳ．結果

アンケート用紙は58枚配布し、45枚回収することができた。アンケート集計結果、〔資料２表１〕少しの間子どもをみてほしい25名（31%）、家に戻る時間がほしい24名（29%）、身体を拭いてほしい10名（12%）、相談事や心配事を聞いてほしい８名（10%）、氷枕をかえてほしい７名（9%）、吸入してほしい３名（4%）、子どもとあそんでほしい２名（2%）、薬を飲ませてほしい２名（2%）、熱をはかってほしい１名（1%）、歯磨き・洗面をしてほしい１名（1%）、オムツを交換してほしい０名（0%）となった。そのうち0～2歳の母親からのアンケート回収枚数が多く〔資料２表２〕、58名中33名の家族が「兄弟がいる」ことがわかった。

母親たちは看護師に対して身の周りの援助をしてほしいよりも、付き添いをすることで自分の時間がないため、子どもの面倒を見て欲しいという希望が多かった。

Ⅵ．考察

１）24時間の付き添いによる母親のストレス

乳幼児は一人になることの恐れから、自分の安心できる存在、特に母親がいなければ、泣き出してしまう。そのため、常に誰かがそばにいられるような環境を作ることが必要である。しかし、付き添い者は家庭での役割もあり、付き添いとの両立をしなければならない現状がある。同胞がいる場合では、なおさら同胞の世話や行事などもあり忙しい。

24時間付き添うことは、入院している子どもの世話以外のことをする時間が難しく、そのため、「少しの間子どもをみてほしい」「家に戻る時間が欲しい」の“看病以外のことをする時間が欲しい”という結果が上位を占めたのではないかと考える。

奈良間[1]は「乳幼児期とくに7ヶ月ごろから3、4歳までは、特定の人とのアタッチメントを形成する段階にあり、多くは母親に生活の大部分を依存し、母親もしくは母親に代わる人を心の安全基地として生活している。病気や治療による苦痛や不安・不快があるときは、よりいっそう母親を求めようとするが、それが満たされなかった場合には分離不安を生じる。」と述べている。ことからも、子どもに求められているものが大きい母親は、入院し、不安な状態である子どもから離れることができず、自分の時間を確保することが難しい状況にあると言える。また、江森らは[2]「付き添い者の負担の要因として環境の変化があり、それによって睡眠障害・体調不良が生じていた」ということを明らかにしており、入院は子どものみではなく、付き添いする母親にとっても負担となっていることがわかる。

付き添い者のストレスを軽減したいという気持ちはあるが、限られたスタッフの人数で、入院中の受け持ち患者の看護以外に緊急入院の処置も行わなければならないため、負担を軽減するのは難しい現状がある。しかし、今回の研究で、付き添い者は“時間がほしい”ということがわかったため、可能な限り協力できるように、声掛けをし、コミュニケーションを図っていこうと考える。

また「身体を拭いてほしい」が３番目に多い項目であった。清拭は日勤の午前中に行っているが、眠っている子

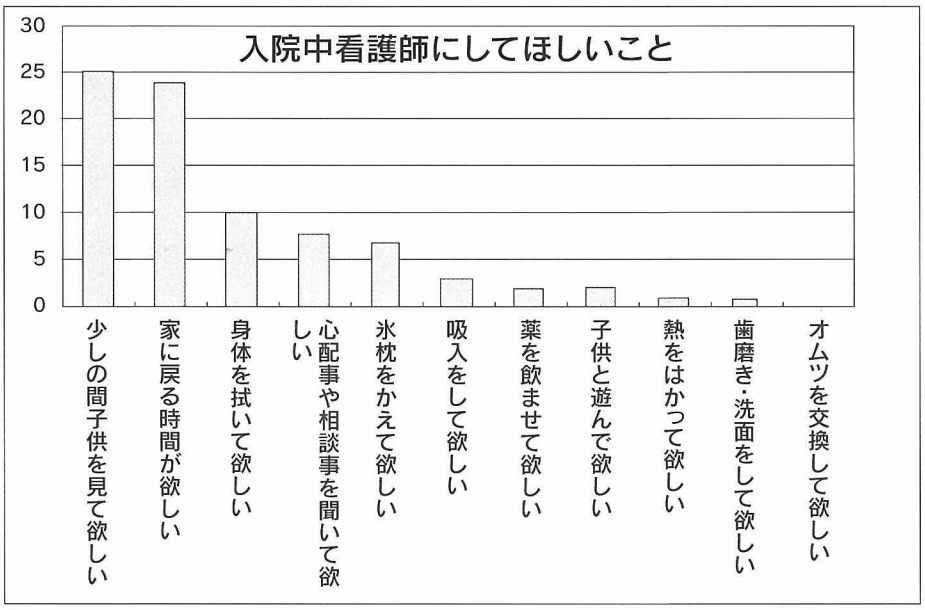
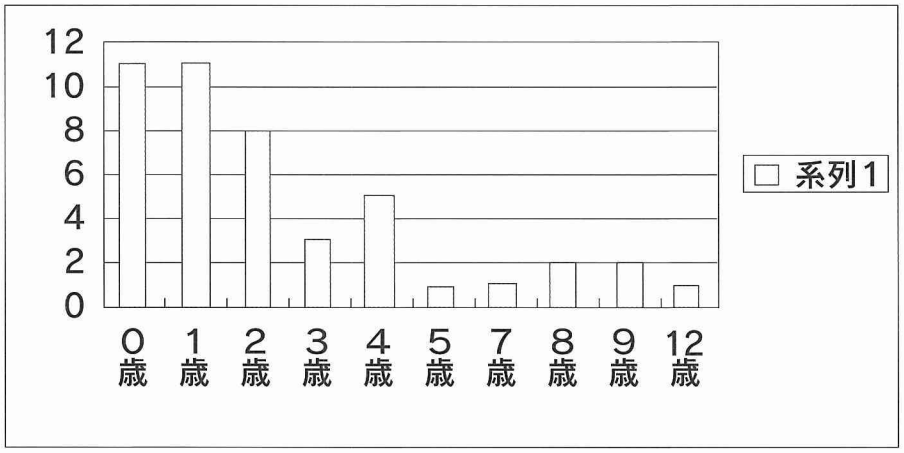


図１．アンケート項目別集計結果

表２．アンケートを回収できた５８名中の患児の年齢層



どもに関しては、起きてから拭くようにしている。自由記載に「寝ているから後で、と言って来ない。」というコメントがあり、看護師から日勤の次の勤務時、「体を拭いていないから拭いてください。」と言われることが何回かあったという意見が聞かれた。この事実から、「身体を拭いてほしい」が多かったのではないかと思われる。気をつけているつもりではあるが、日々の業務の中で忘れられているという現状があることがわかった。入院という普段と違う環境にいることでもストレスに繋がり、身体的な苦痛や不快を抱えている患児、それを支える家族に不快な思いをさせないようにしていくことが必要である。訪室する機会を増やし、母親に言われる前に気づき、行っていくという気遣いや、携わった看護師ひとりひとりが最後まで責任を持つという姿勢が大切であると考える。

２）病気になった子どもに対する不安

４番目に「相談事や心配事を聞いて欲しい。」の項目が多かった。現在の核家族化で、祖父母に教わる機会もなく、入院を期に看護師に尋ねられるという期待を持っており、患児の病気に対する不安や、育児についての不安を抱えていることが分かった。少子化が進む中で、子どもに対する親の思い入れが過去に比べて強くなっている傾向があり、分からないことは意欲的に尋ねてくる。

小栗ら[3]は「母親は、患児の病気に対する不安、病児を支えていかなければならない精神的負担、同胞への精神的な影響への不安などさまざまな不安を持っている」と述べている。

看護師もその要望に応え、専門的な知識を持ち、分かり

やすく説明、指導していかなければならない。

この不安に対応するために、入院時案内のファイルに小児の疾患やケアに関する資料を入れて、その時の状況に応じて説明することによって、親の不安の軽減に繋がると考えた。

Ⅶ．結論

１．子どもの入院の付き添いをすることにより、家庭での役割を十分に果すことができず、主に母親の負担が大きいため、不安・負担を解消できるようコミュニケーションを図っていく。

２．入院を機会に、病気の子どもの育児についての不安を解消しようという傾向があるため、入院時のファイルに個々にあった疾患に関する資料を入れて説明していく。

Ⅷ．おわりに

患児の健康回復を促進し、入院生活における患児と付き添い者のストレスを最小限にしていくために、十分にコミュニケーションをとり、患児にとっての入院環境を整えると同時に、付き添い者にとっての生活環境を整備していくことが求められる。近年の社会状況をふまえ、付き添いに対する要望を出来るだけかなえ、サポートしていく必要があると考える。

＜引用文献＞

１）奈良間美保：医学書院，小児看護学〔１〕小児看護学概論　小児臨床看護学総論，Ｐ432～435，

２）江森寛子，他：入院患児に付き添う家族の負担，第35回日本看護学会論文集（小児看護），Ｐ18-19，2004

３）小栗明美，他：母親が付き添うことに関する看護婦と母親の思いのずれの検討、第28回日本看護学集録（小児看護），Ｐ75，1997

資料１.

今回私たちは、当院小児科病棟における付き添いをする人の現状を知り、より良い看護を目指すための研究をしています。
このアンケートに回答する、しないに関わらず、診療・看護上に不利益が生じないこと、無記名で行い、回収物は今回の研究以外には使用せず、厳重に保管します。

Q　お子さんの年齢は何歳ですか？　　**お母様の年齢は何歳ですか？**

（　　）歳　　**（　　）歳**

Q　お子さんは兄弟がいますか？　　**（　　）人**

Q　入院中、看護師にしてほしいことはありますか？　○をつけてください。複数回答可

少しの間子どもをみてほしい
子どもとあそんでほしい
身体をふいてほしい
オムツを交換してほしい
歯磨き・洗面をしてほしい
家に戻る時間がほしい
相談事や心配事を聞いてほしい
熱をはかってほしい
吸入してほしい
薬を飲ませてほしい
氷枕をかえてほしい

その他（　　）

３階東病棟　　小児科スタッフ一同